

玉川図書館ミニギャラリー

郷土史を彩る歴史家たち

1 前田家の修史事業

小 瀬 甫 庵

山田四郎右衛門

前 田 綱 紀

馬 淵 高 定

青 地 礼 幹

2 吏僚の歴史家たち

高 沢 忠 順

富 田 景 周

津 田 政 隣

奥 村 尚 寛

湯 浅 祇 庸

浅 野 屋 佐 平

森 田 柿 園

3 郷土史研究の勃興

野 口 之 布

平 岩 晋

大 屋 愷 敏

永 山 近 彰

黒 本 稼 堂

氏 家 栄 太 郎

和 田 文 次 郎

館 残 翁

近 藤 磐 雄

4 郷土史料集の出版

日 置 謙

小 田 吉 之 丈

八 田 健 一

宮 本 謙 吾

鎚 木 勢 岐

副 田 松 園

中 本 恕 堂

日時 令和6年10月29日（火）～11月10日（日）

場所 玉川図書館 1階 ロビー

金沢市立玉川図書館

はじめに

本展示では、郷土史研究を担った人びとを説明パネル及び当館所蔵の郷土資料により紹介します。

今回取り上げるのは、江戸時代初期から昭和前期までの期間に、現在の石川县域に在住し、主に郷土の歴史研究に従事した人びとです。当地で歴史研究に携わる人びとは多岐にわたりますが、採録にあたっては歴史に関する著書を有する方に限定し、また戦前までに著書を執筆又は刊行している方で区切りをつけることにしました。また、『蘭山私記』104冊を執筆した加藤惟寅、『飛々羅』50余冊を執筆した岩原恵規など、作者と書名は伝わっているものの、著書が現存していない方も取り上げていません。

取り上げた方々は概ね生年順に配列し、主な活躍時期ごとに、①江戸時代前期以降、②江戸時代後期以降、③明治時代前期以降、④昭和時代前期以降の4つの時期に区分しました。個々人の略歴を紹介しつつ、それぞれの時期の特徴を解説します。

1. 【江戸時代前期～】前田家の修史編纂

日本の歴史編纂は古代の『古事記』や六国史にまで遡りますが、歴史を叙述する行為が日本の各地で広範に成立するのは江戸時代になってからのことです。江戸時代は、諸文化・諸学問の向上が著しく、過去の歴史を調べ、叙述する行為がさまざまな個人・集団によって行われた時代でした（平野仁也『江戸幕府の歴史編纂事業と創業史』）。ただし、国家レベルでの歴史編纂事業は江戸時代初期の段階では行われておらず、まず天下人の事績を故老が書き留めた「創業記」と呼ばれる書物群が成立しました（高柳光寿「近世初期に於ける史学の展開」、『本邦史学史論叢 下巻』所収）。その好例が前田利常に御伽衆として仕えた小瀬甫庵による『信長記』、『太閤記』です。また、前田家の創業記もその家臣たちによってしだいに執筆されていきました。割場附宰領足輕の山田四郎右衛門によって書かれた『三壺聞書』は江戸時代初期の前田家の創業及び金沢の事績を伝える数少ない記録史料です。しかし、この時代の歴史書の特徴として、記載が自身の経験や伝聞情報に基づいているため、出典が明記されておらず、その事実の正確さを他史料で検証できないことが挙げられます。

前田家の5代目当主となった前田綱紀は好学の大名として知られています。綱紀は、義父で後見役だった保科正之や、母方の叔父で『大日本史』の編纂を命じた徳川光圀に影響を受けながら、独自に日本全国の歴史調査に着手しました。その手法は、全国各地に書物調奉行と呼ばれる家臣を派遣し、貸借や筆写をさせ、手元に留めるというものでした（菊池紳一「前田家の図書蒐集－保存と編纂－」、『ふるさと石川歴史館』所収）。こうして集められた蔵書は「尊敬閣蔵書」と呼ばれ、新井白石をして「加州は天下の書府」と言わしめるほどでした。前田綱紀の歴史編纂は『大日本史』のような通史の叙述を目的としておらず、史料を保存し後世に伝える「蒐集」に重きを置いたものでした。

学問好きな大名のもとに木下順庵や室鳩巢などの儒者が集められ、その薫陶を受けた家臣たちの中から歴史書や記録を編纂する人びとが現れます（馬淵高定、青地礼幹など）。前田綱紀の没後、前田家による書物蒐集事業は停滞しましたが、前田家の歴史に対する強い関心はその後も当地の歴史編纂事業を下支えすることとなりました。

おぜ ほあん【小瀬甫庵】

永禄7(1564)年～ 寛永17(1640)年 美濃土岐氏の庶流で、初め池田勝久に仕え、ついで豊臣秀次に仕えた。秀次の没後、堀尾吉晴の医師となった。寛永元年(1624)前田利常に仕え、世子光高に軍学を伝えた。主な著書に『信長記』、『太閤記』がある。(『加能郷土辞彙』)

やまだ しろえもん【山田四郎右衛門】

元和4(1618)年～ 元禄9・10(1696)年 『三壺聞書』の著者。割場附宰領足輕(公用の荷物が江戸又は京に運搬される際に、それを保護監督する役職)を勤めていたと伝えられている。前田利常の時に切米34俵を受けた。(『加能郷土辞彙』、『三壺聞書』(日置謙解説))

まえだ つなのり【前田綱紀】

寛永20(1643)年～ 享保9(1724)年 加賀前田家第4代当主、光高の長男として生まれる。正保2年(1645)に家督を相続し、承応3年(1654)加賀守に叙任し、綱利を名乗った。貞享元年(1684)綱紀に改め、元禄6年(1693)参議となった。学問を好み、『桑華字苑』、『桑華書志』など多くの著作がある。(『加能郷土辞彙』、『加越能書籍一覧』)

まぶち たかさだ【馬淵高定】

明暦3(1657)年～ 享保7(1722)年 通称友之進。寛文11年(1671)前田綱紀の奥小将となり、延宝7年(1679)馬廻組、天和2年(1682)大小将組に属し、宝永2年(1705)より享保3年(1718)まで宮腰町奉行を勤めた。その著『武家昆目集』160巻は、武士の事績、將軍の興廃、古戦の武功、系譜家伝、神社仏閣、山川名勝等を記した大著である。(『加能郷土辞彙』)

あおじ のりもと【青地礼幹】

延宝3(1675)年～ 延享元(1744)年 青地定政の次男。元禄6年(1693)大小将組、同10年表小将となり、宝永5年(1708)前田吉徳夫人松姫の新殿造営、同7年京都の二條吉忠夫人栄君の居邸修繕に携わった。享保元年(1716)使番、同2年歩頭、同5年先手足輕頭、同12年新番頭、元文5年(1740)小将組頭となった。室鳩巢に学んだ儒者であるとともに、大槻朝元^{おおつきとももと}を弾劾した1人でもある。主な著書に『可観小説』、『俊新秘策』がある。(『加能郷土辞彙』、『可観小説』(日置謙解説))

コラム① 宮腰町奉行、馬淵友之進の功績

正徳2年(1712)、宮腰町奉行の馬淵友之進^{まぶちともしん}は宮腰^{みやのこし}(現在の金石)助成のための米銀を寄進することを佐那武社^{さなたけしや}(現在の太野湊神社)の両神主に申し渡しました。その意図するところは「永代不易に長久なるは御神物」との認識に基づき、助成資金の運用に永続性を持たせることにありました。また、それは「当国太守公御武運増長」と「所繫榮」の祈祷料を兼ねたものでもありました。

さらに、享保2年(1717)には佐那武社の夏祭り開催費用の助成のため、宮腰問屋に売上の一部取立を命じています(以上、『佐那武社古文類聚』)。馬淵友之進の施策は、神社へ奉納という形をとることで、神社経営の助成と宮腰の繁栄とを同時に実現しようとするもので、経済に明るい能吏であり、かつ忠義と信仰に厚い人物像が窺えます。

この馬淵友之進こそ、武家の誕生から前田家の創業までを明らかにした『武家昆目集』160巻を著した馬淵高定^{まぶちたかさだ}その人でした。

2 【江戸時代後期～】吏僚の歴史家たち

前田家による強力な歴史編纂の推進がなくなった後、当地の歴史叙述を担ったのは前田家に仕える吏僚やその陪臣たちでした。

この時期の歴史家には大きく二つの類型があります。一つは、高沢忠順^{たかざわただより}、奥村尚寛^{おくむらながのぶ}など、自らの役儀に関わる編年記録をまとめた類型です。高沢忠順^{かいざくしゅん}の名著『改作所旧記』は、自身が改作奉行を勤める中で、その業務の指針を得るために編纂を志したものと考えられます。奥村尚寛^{しゅうりき}の『袖裏雑記』も加賀八家の年寄として政策を決定する際に、先例を参照するために過去の記録を編纂したものです。浅野屋佐平^{あさのやさへい}が『小松旧記』^{こまつきゅうき}を編纂したのも、金沢町会所の旧記調理方主附としての役儀に基づくものでした。

一方、富田景周^{とだかげちか}、津田政隣^{つだまさちか}、湯浅祇庸^{ゆあさやすね}、森田柿園^{もりたしえん}らは、自らの役儀の範疇を超えて歴史編纂に携わった人びとです。富田景周は儒学、津田政隣は記録好き、湯浅祇庸は書写役、森田柿園は父祖以来の記録収集を好む家柄と、それぞれ背景にあるものは違いますが、公務の傍ら寸暇を惜しんで歴史編纂に情熱を傾けた人びとでした。なお、森田柿園の執筆活動のピークは明治時代前期ですが、江戸時代末期から執筆活動を開始しています。

たかざわ ただより 【高沢忠順】

享保 17 (1732) 年～ 寛政 11 (1799) 年 通称平次右衛門。宝暦 7 年 (1757) 遺知 450 石を受け継ぎ、馬廻組に属し、能州郡奉行、改作奉行、加州郡奉行、物頭並御作事奉行を歴任した。その編著『改作所旧記』は別名『高沢録』とも呼ばれ、改作法の法令集として史料価値が高い。(『加能郷土辞彙』)

とだ かげちか 【富田景周】

延享 3 (1746) 年～ 文政 11 (1828) 年 宝暦 12 年 (1762) 富田宗家を継ぎ、安永 4 年 (1775) 天徳院請取火消、同 9 年小松城番、天明 5 年 (1785) 算用場奉行、能州御預地方奉行となった。同 6 年実弟彦左衛門好礼の事件に連座し職を解かれたが、寛政 4 年 (1792) 許され、同 7 年天徳院請取火消、享和 3 年 (1803) 出銀奉行となった。歴史に詳しく、『越登賀三州志』、『燕台風雅』を編纂した。(『加能郷土辞彙』)

つだ まさちか 【津田政隣】

宝暦 6 (1756) 年～ 文化 11 (1814) 年 明和期 (1764～1772) に世禄 700 石を継ぎ、天明期 (1781～1789) 以後に前田治脩及び齊広に仕えた。大小将番頭、歩頭、町奉行、大小将頭をへて馬廻頭に進み、宗門奉行を兼ねた。読書を好み、『政隣記』11 冊、『耳目甄録』20 冊を著した。(『加能郷土辞彙』)

おくむら ながのぶ 【奥村尚寛】

宝暦 7 (1757) 年～ 享和 3 (1803) 年 加賀八家奥村宗家の 10 代目当主。明和 2 年 (1765) 宗家を継ぎ、安永 6 年 (1777) 河内守に叙せられた。寛政 4 年 (1792) 明倫堂設置の総奉行となり、周易を新井白蛾^{あらいほくが}に学んだ。その著『袖裏雑記』は江戸時代前期の史料集として『加賀藩史料』に多数収録されている。(『加能郷土辞彙』)

ゆあさ やすつね【湯浅祇庸】

天明 5 (1785) 年～ 万延元 (1860) 年 通称弥左衛門。初め定番御歩の書写役であったが、文政元年 (1818) 新番組書写役となった。弘化 2 年 (1845) 書物奉行兼書写方奉行兼南土蔵奉行となった。旧例典故に精通し、『北藩秘鑑』、『藩国官職通考』等を著した。『加能郷土辞彙』

あさのや さへい【浅野屋佐平】

文化 11 (1814) 年～ 慶応元 (1865) 年 金沢で運送業 (飛脚) を勤めた。和歌を田中躬之^{たなかみゆき}に学び、福岡惣助^{ふくおかそうすけ}と交わり、文久 2 年 (1862) 京都の騷擾に関し形勢を探索し国元に報告した。元治元年 (1864) 捕らえられ永牢の刑に処された。金沢町会所の旧記調理方主附をしていた時に小松町会所で『小松旧記』の編纂に従事した。『加能郷土辞彙』、『加賀藩史料』藩末篇上巻)

もりた しえん【森田柿園】

文政 6 (1823) 年～ 明治 41 (1908) 年 通称平次、また良見ともいう。茨木家に仕え、その家譜編纂に従事した。維新後、前田家の家録編輯や書籍取調、加越能三州の事績の記録編纂などを行った。主な著書に『松雲公採集遺編類纂』、『加能越古文叢』、『金沢古蹟志』などがある。『加能郷土辞彙』、『森田文庫目録』)

コラム② 富田景周の実弟、富田好礼について

天明 6 年 (1786) 8 月、大坂に滞在中の富田彦左衛門^{とだ ひこざえもん}を召し取るため、盗賊改方足輕が派遣されました。その罪状は「御勝手向御改法^{おかってむきごかいほう}」のことを池田忠左衛門^{いけだちゅうざえもん}とともに前田家 10 代目当主の前田重教^{まえだ しげみち}に献策し、大坂町人井川善六^{いがわぜんろく}と協調して、領主財政のことを画策したことによるものでした (『加賀藩史料 第 9 編』)。具体的な献策内容は伝わらないものの、上方の豪商を巻き込んだ大胆な財政再建案で、前田重教の承認のもと、算用場奉行の了解を得ないまま進められたようです。しかし、当主の代替わりをへて、反対派の巻き返しに遭ったというのが事の真相のように思われます。

この富田彦左衛門は諱を好礼^{よしのり}といい、富田景周の実弟でした。富田景周は富田分家の長男でしたが、富田宗家の跡継ぎとなったため、弟の好礼が富田分家を相続しました。そのため、富田景周は実弟の罪に連座し、算用場奉行の職を解任されました。

金沢に護送された彦左衛門こと好礼は、その後五箇山に流罪となりました。好礼は学問に優れ、配所の五箇山で『論語餘補』4 巻、『政則』10 巻を著しました。文政 4 年 (1821) 許されて金沢に戻り、その 2 年後に 77 歳で没しました (『加能郷土辞彙』)。

3 【明治時代前期～】郷土史研究の勃興

明治維新による政治・社会の変革をへて、前田家による加越能 3 ケ国の支配は終わりを迎えました。旧時代の文物が急速に失われていく中で、前田家伝来の古文書に関与し、歴史編纂に生かした 1 人が江戸末期から歴史考証家として活躍していた森田柿園^{もりたかきその}でした。彼は江戸時代以来の研究蓄積と、前田家から貸与された史料を用いて、『松雲公採集遺編類纂』、『加能越古文叢』、『金沢古蹟志』など膨大な著作を生み出していきました (『森田文庫目録』)。

一方、東京に移った前田家でも、先代前田慶寧の遺志を継いだ 15 代当主、前田利嗣^{まえだとしつぐ}が邸内に編輯方を設け、藩史編纂事業を開始しました (堀井美里「近代以降の石川県における史料蒐集の動向」)

(『金沢大学資料館紀要 第5号』、2010年所収)。

明治時代の歴史編纂の担い手には以下の特徴があります。彼らは江戸時代末期に生まれ、近代以前の教育を受け、その後新しい社会に適応していった人びとでした。その中には、たとえば江戸幕府の学問所で、全国の俊才が集った昌平黌^{しょうへいこう}で学び、尊王攘夷運動に身を投じて処罰を受け、明治維新後復帰した野口之布^{のぐちゆきのふ}のように、幕末維新期の荒波をくぐり抜けてきた人もいました。彼らの身の落ち着き先は、①学校教師、②前田家編輯方、③新聞記者の3つであることが多く、前田家編輯方には学校教師や新聞記者として活動した人びとが含まれていました。

新聞記者から歴史家として頭角を現したのが和田文次郎^{わだぶんじろう}です。東京専門学校卒業後、郷里で新聞記者を勤めながら、歴史研究に従事し、県内の郡誌や金沢案内を多数執筆しました。大正4年(1915)、和田らの主唱で発足した加越能史談会^{かえつのうしだんかい}は、郷土史料の収集調査と発表、史跡の維持保存などを目的に、講演会、展覧会、書籍の出版、史蹟顕彰・保存運動など多彩な活動を繰り広げました(『金沢の百年 大正・昭和編』)。

加越能史談会の活動は、昭和5年(1930)に和田が亡くなるとしだいに振るわなくなりましたが、この中から氏家栄太郎^{うじいええいたろう}、鏑木勢岐^{かぶらきせいき}、小田吉之丈^{おだきちのじょう}といった次代の歴史研究を担う人材が輩出されていきました(『郷土史叢』)。

のぐち ゆきのふ【野口之布】

文政13(1830)年～ 明治31(1898)年 加賀八家の横山家に仕え、万延元年(1860)昌平黌に学んだ。元治元年(1864)尊王攘夷運動に関わり禁牢処分となるが、明治元年(1868)許され北越戦争に参加した。文部省・司法省への属官をへて、前田家編輯方に入った。主な著書に『加賀藩勤王始末』、『犀陽遺文』がある。(『加能郷土辞彙』)

ひらいわ すすむ【平岩 晋】

天保2(1833)年～ 明治35(1902)年 号は雪湖。前田家臣の阿部家に仕えた。能書家として知られ、維新後県立各学校で教鞭をとった。主な著書に『金城勝覧図誌』がある。(『阿部甚十郎旧蔵史料目録』、『金沢墓誌』)

おおや よしあつ【大屋愷敬】

天保8(1839)年～ 明治34(1901)年 安政年間京都に遊学し、傍ら岸岱に画を学んだ。帰国後安達寛栗^{あだちひろたか}と鹿田正明^{しかたまさあき}から西洋学を学び、壮猶館翻訳方、鉄砲局承事、金沢県文学教師などを歴任した。主な著書に『金沢名数』、『皇統小史』、『皇国地誌』等がある。(『加能郷土辞彙』、『かなざわ偉人物語 第1巻』)

ながやま ちかあき【永山近彰】

安政期頃(1853)年～ 昭和16(1941)年 加藤恒が金沢品川町で開いた私塾蛾術館で助教を勤めた。のち前田家編輯方に入り宝物掛を勤めた。主な著書に『淳正公家伝』、『加賀藩史稿』などがある。(『石川百年史』、『金沢の百年 明治編』、『金沢市教育史稿』、『旧藩と新人物』)

くろもと かどう【黒本稼堂】

安政5(1858)年～ 昭和11(1936)年 通称は植。石川郡宮腰に生まれた。藤田容斎^{ふじたようさい}(維正)に和漢の学を学び、第四高等学校・第五高等学校等で教鞭をとった。その著作は『稼堂叢書』にまとめられている。(『加能郷土辞彙』)

うじいえ えいたろう【氏家栄太郎】

文久3(1863)年～ 昭和14(1939)年 金沢市彦三に生まれる。明治12年(1879)金沢電信局修技生となり、同37年の退官まで電信業務に携わった。昭和5年(1930)加越能史談会理事、同7年金沢市立図書館郷土資料蒐集調査方、金沢文化協会評議員兼幹事となった。主な著書に『汲古雑録』、『昔の金沢』などがある。(『石川県大百科事典』)

わだ ぶんじろう【和田文次郎】

慶応元(1865)年～ 昭和5(1930)年 号は尚軒。金沢御門前町に生まれ、藤田容斎(維正)などに漢詩・作文を学び、師範学校、石川県専門学校予科、東京専門学校(早大の前身)に学んだ。石川県内外の郡誌、『金沢墓誌』、『稿本金沢市史』など多くの著書を残した。大正4年(1915)加越能史談会を設立し、代表を務めた。(『石川県大百科事典』)

たち ざんおう【館残翁】

慶応3(1867)年～ 昭和22(1947)年 野々市の醸造元の家生まれる。大正3年(1914)大乘寺の開山、徹通義介の骨壺が発見されたのをきっかけに、大乘寺とその開基の守護富樫氏の研究を始めた。主な著書に『加賀大乘寺史』、『富樫氏と加賀一向一揆史料』がある。(『日本人名大辞典』)

こんどう いわお【近藤磐雄】

明治初(1868)年～ 大正末・昭和初(1926)年 金沢藩士近藤東馬の子として生まれた。久徴館に寄りつつ、「マーコレ先生の学校」(明治学院の前身か)等に学んだ。明治34年(1901)頃前田家の家従となり、同41～42年に『加賀松雲公』を刊行した。加越能時報社の主幹も勤めた。(『定本加賀藩被差別部落関係史料集成』)

コラム③ ある陪臣の明治維新－平岩晋の場合－

^{ひらいわすすむ}平岩 晋は通称を丈左衛門といい、前田家に仕える阿部家1,500石の家臣でした。つまり、前田家からみると陪臣という立場になります。

幕末期の阿部家の当主、^{じんじゅうろう}甚十郎は青年期に長崎に留学し、^{こんどういわごろう}近藤岩五郎一件(近藤岩五郎が長崎で薩摩藩士を殺害し切腹した事件)の事後処理に奔走し、七尾町奉行の際には開港場の調査に訪れたアーネスト・サトウらを応接し、北越戦争時には家中を引き連れて参戦し^{まえだよしやす}前田慶寧から褒詞を受けた人物でした。

平岩丈左衛門はそのような阿部家中を差配する立場にあり、彼が提出した正月飾り省略の意見書、北越戦争における家中への褒賞案などが残されています。

明治維新後、平岩丈左衛門は平岩晋と改名し、県立学校で教鞭をとりながら、金沢の地誌『金城勝覧図誌』を刊行しました。一方、阿部家中は解体されたものの、阿部甚十郎から改名した阿部碧海と平岩晋との交流は続き、阿部碧海の母が死去した際には平岩晋が葬儀を手配しています(以上、『阿部甚十郎旧蔵史料(阿部碧海資料)目録』)。

4 【昭和時代前期～】郷土史料集の出版

昭和期に入り、精力的に歴史書を執筆したのが日置謙^{へき けん}です。彼はそれまで金沢第一中学校等で教鞭をとりつつ、歴史研究を進めていましたが、大正15年（1926）に教職を退き、歴史研究に専念しました。

昭和3年（1928）、日置謙は前田家からの要請を受けて前田家編輯方の嘱託となりました。その経緯について、『加賀藩史料 第1輯』の「緒言」に以下のように書かれています。

「蓋し加賀藩史の如き特殊の研究は、多年之に没頭するを要し、而して略々通曉したる時には総髪半ば白からざるを得ず。随ひて加賀藩史稟に類する編纂方法を擇ばず、到底一人の生涯を以て完了すること難く、その人を代ふれば、即ち論断文章自から異ならざる能はざるなり。故に若しこの欠点を避け、仮令多年に亘りて数々編纂者を代ふるも、常に同一方針を以て事業の進捗を謀らんとせば、史料その物を世に発表し、之が利用は学者各自の研究に一任するを勝れりとすべく、慶寧・利嗣二卿の遺志亦かくして遂行し得べきが如く考慮せらる。」

以上の意見書を前田利為侯爵^{まえだとしなり}に提出したところ、採用されて前田家編輯方の史料整理及び刊行を命じられたということです。

加賀藩史の研究は非常に時間がかかり、『加賀藩史稟^{かがはんしこう}』のような歴史叙述による編纂方法を採用した場合、到底一人の生涯で完了することはできない。そこで、史料集を刊行し、その利用を研究者に一任してはどうか、というのが日置謙の主張でした。

この歴史編纂に関する日置謙の考え方は『加賀藩史料』に限ったものではありません。昭和期に石川県図書館協会と金沢文化協会が互いに競うようにして史料集を刊行していきますが、いずれも日置謙が校訂の任に当たっており、上記の歴史編纂の考え方が場所を変えて実現されたものと言えます。

このような歴史叙述より史料編纂を重視する考え方は、当地の歴史編纂を興した前田綱紀から森田柿園をへて、日置謙により集大成されたと見ることもできます。また、『加賀藩史料』の刊行を可能にしたのは日置謙の努力もさることながら、加賀藩史の刊行のため史料収集を続けてきた前田家編輯方の蓄積、前田侯爵家の支援によるところが大きいことにも留意する必要があります。

日置謙による膨大な史料集の刊行は、その意図したとおりに、多くの歴史研究者の史料アクセスを容易にし、これらを抜きにして研究することができないような多大な影響を及ぼしました。また、史料編纂を重視する考え方は、編年体の『加能史料』の刊行など、現代の石川県の歴史編纂の方針にも影響を及ぼし続けています。

へき けん 【日置謙】

明治6（1873）年～ 昭和21（1946）年 第四高等中学校（のちの四高）卒業後、石川県立金沢第一中学校等で教鞭をとった。前田家の編集員、石川県史編纂の嘱託となり、『加賀藩史料』、『石川県史』、『加能郷土辞彙』、『加能古文書』等、石川県の郷土史に関する数多くの基本文献を編纂・執筆した。（『石川県大百科事典』）

おだ きちのじょう 【小田吉之丈】

明治7（1874）年～ 昭和26（1951）年 鹿島郡高階村池崎に生まれる。村会議員・小学校教員・石川県養蚕取締所雇員などをへて、郷里に帰り農耕の傍ら郷土史研究に打ち込んだ。主な著書に『石川県鹿島郡誌』、『加賀藩農政史考』、『射水郡十村土筆』などがある。（『七尾の地方史』25）

はった けんいち【八田健一】

明治 14 (1881) 年～ 昭和 41 (1966) 年 金沢市備中町に生まれた。金沢一中をへて、哲学館大学(現東洋大学)を卒業後、北陸新聞記者、金城女学校教諭、金沢市史編纂室主任などを歴任した。主な著書に『稿本金沢市史 政治編 第 2』、『加賀藩勤王殉難士伝』、『百万石遠鏡』などがある。(『石川県大百科事典』)

みやもと けんご【宮本謙吾】

明治 24 (1891) 年～ 昭和 53 (1978) 年 熊本市出身。関東大震災後、大聖寺に在住し、『大聖寺藩史』、『江沼文献叢書』、『江沼絹業史』等を著した。昭和 12 年頃大聖寺を離れた後も、『えぬのくに』に寄稿し後進の育成を図った。(『加賀江沼人物事典』)

かぶらき せいき【鏑木勢岐】

明治 24 (1891) 年～ 昭和 58 (1983) 年 金石に生まれる。石川県立金沢第一中学校、神宮皇学館の卒業後、金沢一中の教諭となる。退職後、尾山神社宮司、石川護国神社宮司を勤めた。一中在勤時より郷土史研究に従事した。主な著書に『銭屋五兵衛の研究』がある。(『石川県人名事典 現代編 3』)

そえだ しょうえん【副田松園】

明治 30 (1897) 年～ 昭和 35 (1960) 年 金沢市に生まれる。大正 2 年 (1913) 金沢商業学校を卒業後、住友倉庫株式会社(大阪)に就職、昭和 3 年 (1928) 金沢に戻り終戦まで石川県パン統制組合などに勤めるかたわら郷土史を研究、終戦後前田家から依頼されて前田利常の伝記を執筆し、『石川県消防史』の執筆に参加した。主な著書に『白山おろし』、『加賀万歳』などがある。(『北國新聞』)

なかもと じょうどう【中本恕堂】

明治 32 (1899) 年～ 昭和 48 (1973) 年 松任に生まれる。石川師範学校卒業後、石川県内で教職に就くかたわら、句作活動を行い、加賀の千代の研究を進めた。また、郷土史の研究にも力を入れ、昭和 15 年 (1940)『松任町史』を編纂した。(『石川県人名事典 現代編 2』、『日本人名大辞典』)

参考文献：

- 『石川県史 現代篇 3』(石川県、1964 年)
- 堀井美里「近代以降の石川県における史料蒐集の動向」(『金沢大学資料館紀要 第 5 号』、2010 年)
- 梅田千尋「戦前期『石川県史』編纂における使用史料とその特色」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第 23 号』、2013 年)
- 史学会編『本邦史学史論叢 下巻』(富山房、1939 年)
- 部勇造『歴史意識の芽生えと歴史叙述の始まり』(山川出版社、2004 年)
- 平野仁也『江戸幕府の歴史編纂事業と創業史』(清文堂出版、2020 年)
- 小二田章編『地方史誌から世界史へ 比較地方史誌学の射程』(勉誠社、2023 年)
- 日置謙校訂『三壺聞書』(石川県図書館協会、1931 年)
- 『「加賀越中能登」書籍総覧 第 1 巻』(金沢文圃閣、2018 年)
- 『可観小説 後編』(金沢文化協会、1936 年)
- 菊池紳一「前田家の図書蒐集－保存と編纂－」(『ふるさと石川歴史館』、2002 年)
- 赤土文七編『佐那武社古文類聚』(桜井作太郎、1902 年)
- 『加賀藩史料 第 9 編』(前田育徳会、1936 年)
- 日置謙編『加能郷土辞彙』(金沢文化協会、1942 年)
- 『金沢墓誌』(加越能史談、1919 年)
- 『かなざわ偉人物語 1』(金沢市立泉野図書館、1997 年)
- 『金沢の百年 明治編』(金沢市、1965 年)
- 『金沢市教育史稿』(石川県教育会、1919 年)
- 横山健堂『旧藩と新人物』(敬文堂、1901 年、国立国会図書館デジタルコレクションで公開 <https://dl.ndl.go.jp/pid/777585/1/101>)
- 『石川県大百科事典』(北国新聞社、1993 年)
- 『日本人名大辞典』(講談社、2001 年)
- 『森田文庫目録』(石川県立図書館、1994 年)
- 『加賀藩史料 藩末篇上巻』(前田育徳会、1958 年)
- 『金沢の百年 大正・昭和編』(金沢市、1967 年)
- 田中喜男編『定本加賀藩被差別部落関係史料集成』(明石書店、1995 年)
- 『阿部甚十郎旧蔵史料(阿部碧海資料)目録』(金沢市立玉川図書館近世史料館、2011 年、近世史料館ホームページで公開 <https://www2.lib.kanazawa.ishikawa.jp/kinsei/abemokuroku.pdf>)
- 『加賀藩史料 第 1 編』(前田育徳会、1929 年)
- 『七尾の地方史 25』(七尾地方史の会、1991 年)
- 『加賀江沼人物事典』(江沼地方史研究会、1989 年)
- 『石川県人名事典 現代編 3』(石川出版社、1993 年)
- 『北国新聞』
- 『石川県人名事典 現代編 2』(石川出版社、1992 年)

※上記文献は当館で閲覧可能です。